実践研究
私の保育ノートから

子どもと過ごした宝物の生活

保坂悠希

私は今回、大学卒業後から今まで幼稚園に勤めていた六年間を振り返ってみることにした。

大好きな子どもたちとの日々は毎日が発見で、ワクワクするようなことにたくさん出会わせてもらった貴重な時間だった。子どもたちと生活していると、心も体もいつもフル活動で元気いっぱいだった。また、子どもたちのそばにいると、多くのことに気付かされたり、改めて考えさせられたりすることにあふれていた。悩んだり、出勤する足が重い日もあったけれど、子どもたちの顔を見るとそれまでの気持ちがどこかへ飛んで行ってしまうようなことが何度もあった。それは、とっても不思議だったけれど、こんなに自分は子どもたちとの生活が楽しくて大好きなのだなと感じ、力になったのを覚えている。

家族に子どもたちとの出来事を話したり、同僚と熱く語ったり相談し合ったりすることができたのも、心強い支えであり、保育する活力となった。私は、ありがたい環境で保育ができていたのだなと改めて感じている。周囲の人には感謝の思いでいっぱいだ。

最初の三年間は、途中、年中でクラス替えがあったものの、もち上がりで見させてもらうことができた。何もかもが初めての体験で不安も多く反省することもたくさんあったが、その反面、何より子どもと同じで、体験することすべてが新鮮でワクワク、

ドキドキ、一緒に考えて歩んでいくのが楽しかった。振り返ると、濃い三年間だったなと思う。

一年目 ―「穴」じゃなくて「鼻」―

就職して一年目、三歳児の担任になって間もない四月のこと。砂場で子どもたちと過ごしていると、それを見ていたN君がシャベルを持ち、走って私の所へ来た。すると「あな！　あな～！」と私の前で必死にシャベルをブンブン振って地面を指したのだ。

私は〝穴を掘ってほしいのかな〟〝そんなに叫ぶほど強い思いなんだな〟と感じ、せっかくなら驚くくらい大きな穴を掘っちゃおう！　と夢中で穴を掘り始めた。するとN君もしゃがみ込み、どんどんと大きくなる穴をじっと見ていた。ふとN君の顔を見ると、何とも困った表情をしているではないか……。

〝違ったかな〟〝どうすればよかったかな〟と思いをめぐらせつつN君を見ると、鼻の下を伸ばしたり縮めたりしながらピクピクさせていた。その時にハッと気付いた。N君は私に「穴」を掘ってほしかったのではなく、「鼻」をかんでほしかったのだ。

私は慌ててティッシュでN君の鼻をかみながら、すぐに気付けなかったことを謝った。

一年目は、自分が夢中なあまり、こんな失敗も多々あったように思う。〝この子はどう思っているのかな〟〝こうしたいのかな〟と、とにかく目の前にいる子どもと一生懸命に過ごし、やりとりした。これは、一年目だけではなく、ずっとそうだった。しかし、最初に三歳児を見させていただいたことはとても大きかった。自分の言葉だけでは伝えきれない強い思いが、さまざまな表現方法で表される。全身で表現したり、ふとした表情やしぐさを見せたり。一人ひとりをじっくり見つめ、想像して同じ気持ちになることを教えてもらった一年だったように思う。

二年目 ―お弁当を太陽の下で食べる―

ポカポカ春の日差しが気持ちいい日のことだった。

女の子たちが「今日はピクニックしたくなっちゃう〜！」と人工芝が敷いてある二階の広場（芝生広場）にござを運び、せっせとごっこ遊びの準備をしていた。また、男の子たちも「旅に出るんだ！」と言って、風呂敷でごちそうを包むと、私に肩から斜めに背負わせてほしいと、旅支度を始めた。保育室にいるのがもったいない天気に、子どもたちも自然と感じるものがあったのだろう。

春の風が心地よく、子どもたちと一緒に芝生に寝転んでみると大きな青い空と日差しが気持ちよかった。そこから見える八重桜がきれいで、まさにお花見だった。「よしっ！　今日はここでお弁当を食べよう！」。子どもたちに声を掛けると、あっという間にクラス中に広まり、お花見の支度が始まった。

いざ食べ始めると、だんだんと日差しは強まり暑いくらいになってきた。子どもたちは「暑すぎる〜」「夏が来た！」と、頭にお弁当袋を乗せたり、上着をかぶったりし始めた。慌てて日陰に入るよう声を掛けたが、芝生広場は日陰が少ししかなく、全員が入るのには狭かった。子どもたちは詰めたり譲り合ったりしてくれたが、予想外の暑さにどうしようかと思い、子どもたちに相談すると、暑くてもお部屋に帰らずこのまま食べたい！　ということだった。

するとその時、先に食べ終わった男の子たちが食べている仲間の所へやって来て、仁王立ちになった。「俺らがこうやって立っているから食べていいよ！」と言う。ふと見るとちょうど食べている人に影が出来ている。そして、また別の子は、部屋からピアノカバー（綿の薄手な素材）を持ってきて影を作り、暑くないようにしようと頑張ってくれていた。

子どもたちが自分で考えて工夫したこと、仲間を思って行動してくれたことに、子どもたちの力を感じた。この時、いつも自分が先に立ってやっていくのではなく、時には子どもと一緒に並んで考えてみたり、子どもの後からついて行ったりしてもいいのだなと気付かされた。また、子どもたちの発想やひらめきにはいつも驚かされたり、感動させられたり、とても魅力的で心が揺さぶられた。

三年目　―クラスの仲間の一人としての保育者―

また、年長の春にはこんな失敗をして子どもたちに助けてもらったことがあった。

毎日お昼は、お家の人に作ってもらったお弁当で、飲み物は麦茶を一人ひとりのコップに注いでいた。年長に進級したばかりで、新しい保育室で食べるお弁当はいつも以上に盛り上がっていた。「年長おめでとう！」と麦茶で乾杯する子どもたちの姿があり、子どもたちにとって〝年長さんになる〟ということがこんなにもうれしくて大きいことなのだなと強く感じた。私も席に座ると仲間に入れてもらい、一緒に乾杯をすると……おっちょこちょいの私は麦茶をズボンにこぼしてしまったのだ。まるでお漏らしをしてしまったようで、恥ずかしさから思わず手で顔を覆った。

「何やってるの～」「早く着替えておいでよ！」と言う子どもたちに思わず大笑いしながら「先生恥ずかしくてお部屋から出られないよ。どうしよう……」と困って言うと、T君がひらめいたようにピアノカバーを取りに行って、「これを腰に巻いて行けば大丈夫！」と渡してくれたのだ。

私はいつもこんなふうに子どもたちに助けてもらってばかりだった。クラスの一員として子どもと一緒に思い切り過ごしたり、子どもに頼って助けてもらったり、時には先生としてぐいっと引っ張ってみたり……。初めて受けもった年長では、子どもたちと考えたり話し合ったりして一緒に生活をつくり上げる楽しさを知ったように思う。

三年目　―リレーを通して見えたこと―

運動会（十月）では、今まで毎年見てあこがれてきたリレーを自分たちがすることになり、遊んでいく過程の中でも子どもたちの楽しい発想や姿に一緒に考えさせられた。

年長は二クラスある。しかし、うちのクラスはい

つも勝てず、どうしたら勝てるのか、リレーをするたびに自分たちで集まって作戦会議をしていた。全員が輪になり肩を寄せ合って、考えを伝え合っていて真剣だった。「もっとこうやって腕を振って走ればいいんだよ」「鳥みたいに広げて走ってみれば？」とやって見せたり、「手の指をピンとすれば速いよ」「走るのを男の子、女の子の順番にしてみたら？」と考えが出たり、中には「走る途中にバナナの皮を置いておけばいいんだよ！　そうしたら、転ぶから抜かせるよ！」という面白い意見もあった。クラスが笑いに包まれ温かな雰囲気の中、「そうすると自分たちも転んでしまうよ」「バナナいつ食べるんだ～！」とユーモアも交えつつ、真剣に考え、やりとりする子どもたちの真っすぐな様子がかわいらしかった。

子どもたちは〝勝つこと〟にとてもこだわり、「最初に足の速い人が走ったほうがいい」「アンカーが速いと勝てる」と、速さで仲間のことを見ている様子があり、私は、走ることが得意でない人の表情がとても気になっていた。もちろん勝ちたいという思いも大切だけれど、結果ではなく、それまでの過程を大切にしたいなと思った。絵を描くのが好きな人もいれば、電車に詳しい人もいる、踊ることが好きな人もいればドキドキして苦手な人もいる。運動会だけではなく、日々のさまざまな場面で一人ひとりが生き生きと輝けたらいいなと思って保育していた。

私は自分の思いを子どもたちに伝えてみることにした。トップバッターやアンカーも大切だけれど、走ることが苦手だったりドキドキ緊張してしまう人を助けたりつなぐことのできる〝真ん中で走る人〟も大切だという思いも知ってほしかったのだ。

当日は、驚くことに初めて一位になり、子どもはもちろん私もうれしかったが、それ以上に運動会が終わってからの遊びが楽しかった。年少、年中の小さな子どもたちも加わってリレーごっこが園庭で繰り広げられた。自分のバトンが欲しい年少さんにラップの芯に色を塗りバトンを作ってあげたり、どこを走ればいいのか迷子になる年少さんと手をつないで走ってあげるような姿も見られた。

◇　◇　◇

その後、園児数が減った年があり、私は、今までの三十名以上とは違う、一クラス十七名という少人数のクラスを受けもつことになった。

少人数の保育で学ぶこともたくさんあった。それまでは、少ない人数だと、より深くじっくり見ることができたり、かかわって遊べるのだろうなと思っていた。しかしその反面、遊びも盛り上がりに欠けたり、友達関係もなかなか変化せず難しい面もあった。隣のクラスの先生と日々考えて、ままごとコーナーを一つにして一緒に遊べるような環境にしたり、二クラス一緒にお弁当を食べたりと、学年で大きなクラスとして生活してみたりもした。

また、一年を通してたくさん外へ散歩に出かけた。頻繁に散歩に出かけるうちに、生活の中で園の周囲の環境や地域のことにも目を向ける子どもたちの姿があった。〝面白いマークの標識がある〟〝ドングリが落ちていたよ〟〝カルガモの赤ちゃんが生まれて、昨日公園の池で見つけた〟と、日常の会話から子どもたちが今、興味をもっていることや心動かされたことを知り、それをきっかけに出かけることもあった。

秋には年中さんと一緒に手をつないでドングリを拾いに行った。その時には、自分たちが小さい子を守るんだという子どもの思いを感じたり、横断歩道で声を掛けてくれたおばあさんにドングリをあげたりする優しい姿が見られた。また、違う季節に同じ場所に行くことで、自然の変化を肌で感じる子どもの様子があり、私自身も、とても新鮮で楽しかった。私たち保育者がいつもよりも身軽に散歩を計画できたのは、少人数のプラス面だったのかもしれない。

今思うとあっという間の六年間だった。またいつか、子どもとの生活を送りたい思いでいっぱいだ。これからの人生でも子どもに携わって生きていけたらいいなと感じている。

（元幼稚園教諭）